

児童期における攻撃性の構造的関係に関する研究
—児童期における攻撃性の構造的関係尺度作成のための予備的研究—
(中間報告)

大阪人間科学大学 勝間理沙

The structural relations among the functions and forms of aggression in elementary school children: A preliminary study for development of the measurement scale in Japan

Osaka University of Human Sciences, KATSUMA, Lisa

要約

児童期において、対人関係の中で引き起こされる暴力行為やいじめは教育現場でも重大な問題であり、その対策のために多くの研究がなされてきた。本稿では、それらに関わる要因の中で攻撃性に着目し、近年の攻撃性研究を概観し、攻撃性研究の今後の展開として、構造的関係による理解や研究の必要性を提言した。さらに、日本ではそれらを測定する方法の開発が急務であり、測定法開発にあたって考慮しなければならない点を指摘した。最後に、研究の進捗状況ならびに今後の計画が報告された。

【キー・ワード】 攻撃性の構造的関係, 測定法, 児童

Abstract

Over the years, the conflicts among children such as violence and bullying have been addressed and studied a lot as critical problems in educational settings. This article was focused on aggression as one factor of such problems, suggesting that the importance of understanding and research in terms of the structural relations of aggression in the future through reviewing recent studies. In addition, it also suggested that there was an urgent need to develop the scale of measuring the structural relations of aggression in Japan and pointed out the several considerations of the development. Finally, it reported progress of this research.

【Key words】 the structural relations of aggression, measurement scale, elementary school children

問題と目的

児童期では、学校という集団生活が始まり、対人関係に問題が生じてくる時期である。特に暴力行為やいじめなどは、教育現場でも重大な問題となっており、その対策のために多くの分野において研究がなされている。その中で、暴力行為やいじめに関連する個人要因として攻撃性に着目した研究もさかんに行われてきた。実際児童期では、攻撃性の種類や性質の変化がめざましいことが示されている (Bjorkqvist, Lagerspetz, & Kaukiainen, 1992; Huesmann, Eron, Lefkowitz, & Walder, 1988)。

これまで発達領域では、攻撃性を単一のものとしてとらえるのではなく、いくつかの側面をもつものとして細分化してきた。それらの分類法には大きく2つの潮流がある。1つは、攻撃の動機に着目した Dodge and Coie (1987) の分類法であり、怒りなどの攻撃誘発刺激に反応して生じる“反応的攻撃 (reactive aggression)”と支配や目標物の獲得などの何らかの目的達成のために道具的に用いられる“道具的攻撃 (proactive/instrumental aggression)”に分けられる。一方、攻撃行動がどう現れるかに着目した分類としては Crick (1995) の“顕在性攻撃 (overt aggression)”と“関係性攻撃 (relational aggression)”がある。顕在性攻撃の場合は、たたいたり暴言を吐いたりなど表に現れ、他者に直接的に危害を与えるが、関係性攻撃では、他者の人間関係を操作し間接的に他者に危害を与える。このように細分化することで、特に、攻撃性の高い子どもについて、社会的情報処理理論の観点からの認知的側面 (e.g., Crick & Dodge, 1994) や感情的側面 (e.g., Arsenio et al., 2009) の特徴を明らかにしてきた。しかし、前者の分類については両者の相関が高くなってしまいうという測定法上の問題が、またさらに、後者の分類では心理社会的な適応との関連において、関係性攻撃は適応的か、不適応的かという結果が一致していないことなどが指摘されている(勝間, 2013; 勝間・山崎, 2010)。そこで近年さらに、攻撃性の理解について、攻撃性の発動の根底にある機能 (underlying function) と、決定打として現れてくる形態 (overriding form) という観点から組み合わせた構造的関係をとらえることが提言されるようになった (Little, Jones, Henrich, & Hawley, 2003; Marsee & Frick, 2007;

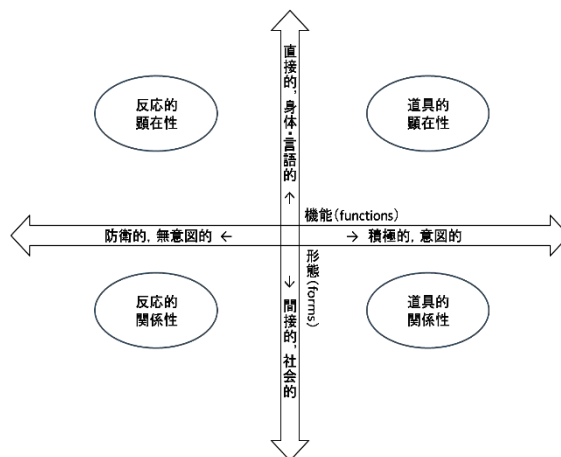


図 1 攻撃性の構造的関係

Prinstein & Cillessen, 2003 ; 攻撃性の構造については図 1)。攻撃性を構造関係からとらえた場合、次の4つのサブタイプとなる；反応的顕在性攻撃，反応的關係性攻撃，道具的顕在性攻撃，道具的關係性攻撃。これらの攻撃性が発動されると、例えば、反応的顕在性攻撃の場合、反応的機能を有し、顕在性の形態によって攻撃を行うことが想定される。

実際に構造的にとらえた攻撃性のサブタイプでは、認知や感情、適応・健康上の問題と異なった関連を示すことが示唆されている。例えば、同じ關係性攻撃形態でも、その機能によって、反応的關係性攻撃では敵意意図帰属バイアス (Bailey & Ostrov, 2008) や感情や怒りのコントロール (Marsee & Frick, 2007) と、道具的關係性攻撃では共感の欠如 (CU 特性; Munoz, Frick, Kimonis, & Aucoin, 2008) やポジティブな反応評価 (Marsee & Frick, 2007) との関連が明らかになっている。さらに Ostrov and Crick (2007) では、反応的關係性攻撃と道具的顕在性攻撃を統計的に統制した後、道具的關係性攻撃と仲間拒否ならびに子どもと教員間の葛藤といった社会的不適応との関連を予測している。これらの研究から、先に述べたような研究結果の混在や、男子のみでの研究という伝統的な攻撃性研究の偏り (e.g., Dodge, 1980; Dodge & Frame, 1982) の中では明らかにならなかったことを、構造的関係においては検討することができることが考えられる。そして今後、攻撃性の構造的関係を明らかにしていくことで、より詳細な攻撃性の理解やその対処・予防のためのアプローチを検討することが可能となるだろう。

先述の研究では、攻撃性の構造関係をとらえるための尺度がそれぞれ開発されている。攻撃性の構造関係について指摘され始めた 2003 年以降で“subtype of aggression”を扱っている 25 本の先行研究を概観してみると、現在開発されている尺度は信頼性と妥当性を検討されたものとしては4つである。1つは、Little et al. (2003) によるもので、4つの攻撃性のサブタイプを、それぞれ機能と形態を組み合わせた6つの質問項目で問うことに加え、理論上のモデルを検討するために攻撃形態は直接観察可能なものであると考え、“純粋な形態 (pure form)”を顕在性、關係性のそれぞれ6項目で測定することが特徴である。2つ目は、Crick ら (Ostrov & Crick, 2007; Linder, Crick, & Collins, 2002) の Self-report of Aggression and Social Behavior Measure (SRASBM) で、11 の下位尺度の中に 4 タイプの攻撃性が含まれている。さらに3つ目は Marsee and Frick らによる The Peer Conflict Scale (PCS) (2007; Marsee, Barry, Childs, Frick, Kimonis, Munoz et al., 2011) で、4 タイプの攻撃性を 10 項目ずつで問う。そして最後に、4タイプの測定を目指したものではないが、攻撃の機能と形態を弁別した測定法である Polman, de Castro, Thomaes, and van Aken (2009) による教師評定尺度が存在している。本邦では、攻撃性の構造関係に着目した研究はいまだ存在していないため、日本で使用可能な尺度を開発していく必要があるだろう。

以上のことから、本研究では、児童の攻撃性を機能と形態の構造関係をとらえられる尺度を作成し、標準化を行うことを目的とする。その際、これまでの尺度を概観して次のことについて検討が必要と考えられる。1つ目は評定者の問題である。先述の尺度はすべて質問紙法で行われていたが、Crick らの一部の研究や Polman et al. (2009) の尺度では教師や仲間による評定がなされている。本研究の対象とする小学校4～6年生の研究では、自己、教師および仲間のいずれの評定者が適切であるかを考えなければならない。さらに2点目として、機能と形態次元の構成要素である。それぞれは前述

の通りこれまで別々の分類方法として研究が発展しており、それぞれの概念のもとには、さらにそれを構成する要素がある。例えば、道具的 (proactive) 攻撃には、“物的志向性”と“対人志向性”の機能があるという考えもある (Hartup, 1974)。それぞれの次元をどのような構成にするかは質問項目を考える上でも重要である。そして最後に、機能と形態の質問紙上での提示の仕方 (順番や組み合わせ等) がある。先の検討事項である各次元の構成要素にも関連しているが、Polman et al. (2009) 以外は3つとも、これまで使われていた機能項目と形態項目を組み合わせ、1文にした質問項目を提示している。ただしすべての構成要素を組み合わせるわけではなく、特に機能項目についてはある構成要素で代表させ、形態項目にバリエーションを持たせている。この場合、機能項目の構成要素が十分に表現されていない可能性が高い。さらに、組み合わせた質問項目の場合、その項目への頻度の回答が“0 (ほとんどない) 得点”であった場合、そもそも“攻撃的でない”のか、“攻撃発動の機能 (動機) が異なっている”ために“ほとんどない”となっているのかが不明である。質問項目が多くなることによる子どもへの負担を考慮しつつ、すべての攻撃機能および形態を測定できる提示方法を考えなければならない。

進捗報告および今後の予定

現在、以上に挙げられた測定法開発において必要となる点を考慮し、項目選定を行っている。項目決定した後は、現職の小学校教員数名を対象として、各項目が小学生4～6年生に対して適切な表現となっているかの聞き取り調査を行い、原版完成させる予定である。

そして、原版を用いて、小学校4～6年生を対象とした攻撃性構造関係測定尺度の信頼性と妥当性検討を行い、標準化を目指す。信頼性ならびに妥当性については、先に挙げられた先行研究と併せて、日本語での言い回しや日本での馴染みややすさを参考にするために、日本児童を対象として標準化されている攻撃性質問紙3本 (濱口桂和, 2002; 坂井・山崎, 2004; 坂井・山崎・曾我・大芦・島井・大竹, 2000) を参照しその検討方法を決定していく予定である。

引用文献

- Arsenio, W., Adams, E., & Gold, J. (2009). Social information processing, moral reasoning and emotion attributions: Relations with adolescents' reactive and proactive aggression. *Child Development, 80*, 1739-1755.
- Bailey, C. A., & Ostrov, J. M. (2008). Differentiating forms and functions of aggression in emerging adults: Associations with hostile attribution biases and normative beliefs. *Journal of Youth and Adolescence, 37*, 713-722.
- Björkqvist, K., Lagerspetz, K. M., & Kaukiainen, A. (1992). Do girls manipulate and boys fight? Developmental trends in regard to direct and indirect aggression. *Aggressive Behavior, 18*, 117-127.

- Crick, N. R. (1995). Relational aggression: The role of intent attributions, feelings of distress, and provocation type. *Development and Psychopathology, 7*, 313-322.
- Crick, N. R., & Dodge, K. A. (1994). A review and reformulation of social information processing mechanisms in children's social adjustment. *Psychological Bulletin, 115*, 74-101.
- Dodge, K. A. (1980). Social cognition and children's aggressive behavior. *Child Development, 51*, 162-170.
- Dodge, K. A., & Coie, J. D. (1987). Social information-processing factors in reactive and proactive aggression in children's peer groups. *Journal of Personality and Social Psychology, 53*, 1146-1158.
- Dodge, K. A., & Frame, C. L. (1982). Social cognitive biases and deficits in aggressive boys. *Child Development, 53*, 620-635.
- Hartup, W. W. (1974). Aggression in childhood: Developmental perspectives. *American Psychologist, 29*, 336-341.
- 濱口佳和 (2002). 反応的・道具的攻撃尺度 (児童用) の作成 : キレ傾向とイジメ傾向の個人差の測定 日本教育心理学会総会発表論文集, 496.
- Huesmann, L. R., Eron, L. D., Lefkowitz, M. M., & Walder, L. O. (1988). Stability of aggression over time and generations. *Developmental Psychology, 17*, 762-765.
- 勝間理沙 (2013). 関係性攻撃研究の再考－研究の新たな方向性を探って－ Human Sciences (大阪人間科学大学紀要), **12**, 81-88.
- 勝間理沙・山崎勝之 (2010). 児童期の関係性攻撃－教育現場における予防的アプローチ実践への示唆－ 鳴門教育大学学校教育研究紀要, **24**, 1-10.
- Linder, J. R., Crick, N. R., & Collins, W. A. (2002). Relational aggression and victimization in young adults' romantic relationships: Associations with perceptions of parent, peer, and romantic relationship quality. *Social Development, 11*, 69-86.
- Little, T. D., Jones, S. M., Henrich, C. C., & Hawley, P. H. (2003). Disentangling the "whys" from the "whats" of aggressive behavior. *International Journal of Behavioral Development, 27*, 122-133.
- Marsee, M. A., & Frick, P. J. (2007). Exploring the cognitive and emotional correlates to proactive and reactive aggression in a sample of detained girls. *Journal of Abnormal Child Psychology, 35*, 969-981.
- Marsee, M. A., Barry, C. T., Childs, K. K., Frick, K. J., Kimonis, E. R., Muñoz, L. C., Aucoin, K. J., Fassnacht, G. M., Kunitatsu, M. M., & Lau, K. S. L. (2011). Assessing the forms and functions of aggression using self-report: Factor structure and invariance of the peer conflict scale in youths. *Psychological Assessment, 23*, 792-804.
- Muñoz, L. C., Frick, P. J., Kimonis, E. R., & Aucoin, K. J. (2008). Types of aggression, responsiveness to provocation, and callous-unemotional traits in detained adolescents. *Journal*

of Abnormal Child Psychology, 36, 15-28.

Ostrov, J. M., & Crick, N. R. (2007). Forms and functions of aggression during early childhood. A short-term longitudinal study. *School Psychology Review*, 36, 22-43.

Polman, H., de Castro, B. O., Thomaes, S., & van Aken, M. (2009). New directions in measuring reactive and proactive aggression: Validation of a teacher questionnaire. *Journal of Abnormal Child Psychology*, 37, 183-193.

Prinstein, M. J., & Cillessen, A. H. (2003). Forms and functions of adolescent peer aggression associated With high levels of peer status. *Merrill-Palmer Quarterly*, 49, 310-342.

坂井明子・山崎勝之（2004）．小学生用 P-R 攻撃性質問紙の作成と信頼性，妥当性の検討 心理学研究, 75, 254-261.

坂井明子・山崎勝之・曾我祥子・大芦治・島井哲志・大竹恵子（2000）．小学生用攻撃性質問紙の作成と信頼性,妥当性の検討 学校保健研究, 42, 423-433.